

交換とアイデンティティを用いた生活環境把握のアプローチ

An Approach of Understanding of the Living Environments Using Social-Exchange and Identity

澤田俊明* 山中英生** 水口裕之**

Toshiaki Sawada* Hideo Yamanaka** Hiroyuki Mizuguchi**

ABSTRACT ;

The purpose of this study is to get knowledge for design of life space from a viewpoint of understanding of the living environment. We discuss here "social-exchange" and "identity." On the social-exchange approach, firstly general view of social-exchange theory is shown. Secondly the relationship between social-exchange and community is discussed. Lastly evaluation indexes of community design by using the principles of social-exchange are given. On the identity approach, based on Imanishi's ideas on identity, the characteristics of identity in life space are defined. This study will contribute to the scientific and effective planning of identity and community.

KEYWORDS ; living environment, social-exchange, community, identity

1. はじめに

人間を含む生物が生活活動に関わる空間を「生活空間」とするとき、空間の見えや配置などの物理的・実体的空間は、その利用者にとって生活空間そのものであり意味を持っている。つまり空間の利用者は、空間の持つ実体的及び意味論的な価値を、個別二元的に分割して享受しているのではなく、同時一元的に享受している。また、生活空間の普遍的な存在要因としては、マンフォード¹やシューマッハー²などの指摘に顕著に見られる多様性・連続性・生物性・社会性・自然環境性などが挙げられる。質の良い生活空間整備のためには、空間の実体的かつ意味論的把握と計画、そして空間の普遍的な存在要因の把握と計画が重要となるが、空間利用者を人間と限定した場合でも、これらの取り組みは現時点では十分とはいえない。

今西³によれば、生物は「単独生活者」と「群れ生活者」に大別され、人間は群れ生活者に区分される。生物の集団性に着目すれば、コミュニティやアイデンティティなどを持つものが群れ生活者であり、そうでないものが単独生活者といえる。このことは、生物社会学的見地から見て、群れ生活者という人間の生物性を念頭においた生活空間整備においては、コミュニティやアイデンティティなどをうまく把握し育成することが不可欠であることを意味する。

コミュニティの研究には、都市計画分野における市町村を対象としたコミュニティの空間計画についての日笠の研究⁴、社会学の分野における1970年代から1990年代にかけて調査研究されたコミュニティの組織と施設に関する菊池らの研究⁵、都市コミュニティについて都市社会学の見地から地域性と普遍性の軸によりコミュニティモデルの構成を「地域共同体」「伝統型アノミー」「コミュニティ」「個我」とした奥田の研究^{6,7}などがある。また、アイデンティティについては、場所のアイデンティティの構成要素・イメージとの関連・諸類型などについて示した地理学者レルフの研究⁸などがある。一方、心理学の分野では、人間の心理的な行動特性を示した神谷らの研究⁹や、心理学の理論的な諸問題を示した安倍らの研究¹⁰がある。

これらの既往の研究は、例えば、世俗を離れすぎて純粋地理学に著しく偏しているとして人文地理学の研

* 建設材料試験所 Kensetsu Zairyo Shiken-syo

** 徳島大学工学部 The University of Tokushima

研究成果の地域政策への活用の必要性を示した伊達の指摘¹¹⁾にも見られるように、主として現象把握・モデル構築・類型化による特徴分析を示しており、幾つかの事例紹介は示されているものの、十分に空間整備の実践の場において、コミュニティ及びアイデンティティ育成について方法論的に示されたものは少ない。また、社会学の分野において鳥越ら¹²⁾は、生活環境把握の視点として居住者の日常生活の立場から見た「生活環境主義」を提唱し、生活のとらえ方として「経験」「権力」「人間相互の無理解」の視点を示している。

本研究は、これら既往の都市計画・社会学・心理学等の研究成果に「生活環境主義」の視点と生物社会学的見地を加味して、生活空間整備の実践の場において、コミュニティ及びアイデンティティを育成する手法を得るための基礎的考察を行う。まず、コミュニティに関しては、これに深く関わると考えられる「交換」概念を取り上げ、交換理論を整理したあと、交換とコミュニティの関係について考察する。そして、生活空間整備手法として既往の文献研究成果を用いて「交換」を介したコミュニティを育成するための評価指標を示す。そして、この評価指標を用いて、香川県・どんぐり銀行及び花巻市・メルヘン歩道の二つの事例をコミュニティ育成の視点から評価する。次に「アイデンティティ」を取り上げ、生物社会学的見地による今西のアイデンティティに関する指摘をもとに、これを再構築して、人間を対象とした生活空間整備におけるアイデンティティ育成のためにアイデンティティの構造を明らかにする。

2. 生活環境把握における「交換」を介したアプローチ

2.1 交換理論

本節では、既往文献より交換理論について整理し、経済的交換と社会的交換の特徴について示す。

私たちの社会の成立・持続には、「交換」と呼ばれる様々なやりとりが存在している。この「交換の概念の中には、金銭や財やサービスのやりとりだけではなく、ある種の行為・態度・感情などの相互間のやりとりも含まれ」¹³⁾ている。交換には、経済的交換と社会的交換があり、ブラウは諸個人間の相互作用が特定化された基準に従うものを経済的交換、そうでないものを社会的交換として、これらを区別している。交換概念の適用範囲としては、ブラウの示した「何らかの報酬を与え合う諸個人の自発的な相互作用」と限定されるのが通常とされている¹⁴⁾。この社会的交換の視点から人間の社会活動を見ようとする調査・研究が、社会学・人類学の分野から行われている。表1は、社会的交換理論（以下、交換理論と略記）に関連する調査・研究を整理して示したものである。石川は、社会学における交換理論の確立に大きく寄与した研究として、1960年前後のホマンズ・ブラウ等の研究成果を挙げ、その後の社会学の中での交換理論の発展があまり見られず、これらの研究成果が現時点でも「現役」であることを指摘している¹⁵⁾。

表 1 社会的交換に関する研究／凡例 ○社会学、※人類学 (注 * : 石川による¹⁶⁾)

西暦年	文献名	特徴	摘要
1900	○G. ジンメル：『貨幣の哲学』	社会的交換に関する洞察	*
1922	※マリノフスキー：『西太平洋の遠洋航海者』	西太平洋のトロブリアンド諸島を中心に、クラ交易などを克明に調査	
1922-1924	※○モース：『贈与論』	交換の原初的形態としての義務的贈答制度の存在の指摘	
1949	※レヴィ＝ストロース：『親族の基本構造』	交叉いとこ婚の構造的分析に関連した交換理論 二者以上の参加による一般的交換	*
1955	○ホマンズ、シュナイダー：『結婚・権威・その究極原因』	レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』における交換理論を批判、社会的交換理論を持つ	*
1959	○J. ティボー、H. ケリー：『集団の社会心理』	行動心理学の概念に大きく依拠、心理学的諸法則から出発し、2人関係における交換活動のメカニズムを追求し、その結果を小集団レベルの研究に摘要しようとした	*
1958	○ホマンズ：『交換としての社会行動』	行動心理学の概念に大きく依拠 二者間の限定交換の場での交換理論	*
1961	○ホマンズ：『社会行動—その基本形態』	集団レベルの相互作用に観察から出発して、心理学的概念を用い、人間個々の交換的・個体的心理メカニズムを究明	
1964	○P. ブラウ：『社会生活における交換と権力』	社会学的立場から社会的交換理論を提示 二者間の限定交換の場での交換理論	*

表 3 経済的交換と社会的交換

経済的交換	社会的交換	指摘者
契約的債務により支えられる	道徳的債務により支えられる	エケー ¹⁹
諸個人間の相互作用が特定化された基準に従うもの	諸個人間の相互作用が特定の基準に従わないもの、社会的交換関係のみが個人的義務、感謝、信頼の感情を引き起こす	ブラウ ²⁰
非人格化された交換関係、当事者間の義務や感謝の感情が1回ごとに完結してしまう	人格化された交換関係、当事者間の義務や感謝の感情は持続する	石川 ²¹

表 2 互酬と非互酬に関する石川の指摘¹⁷

互酬性の交換	非互酬性の交換
（当事者間の）対等な結合を生み出す。互酬の力の発現が制度化されたものが「クラ」	（当事者間で）権力とそれに対する服従という関係を生み出す、つまり地位差を生み出す。非互酬の力の発現が制度化されたものが「ポトラッチ」

エケー、ブラウ、石川による経済的交換と社会的交換の特徴を表2に示す。表より社会的交換が人間の社会構造や社会制度に深く関わっていることがわかる。この社会的交換には、当事者がお互いに与え合うという互酬にもとづく交換と、この関係が破綻した非互酬の交換がある。表3に互酬と非互酬の交換について石川の指摘を示す。また、ボールディングは、交換と互酬は一見したところ似ているように見えるけれども、交換は「～してくれれば～してあげる」という形の条件付きで行われるのに対して、互酬は無条件として、この点で交換と互酬が区別できるという見方を示している¹⁸。

2.2 コミュニティと社会的交換

ここでは、既往文献研究成果よりコミュニティの概念について外観し、コミュニティの創造・育成に社会的交換が関与していることを考察する。

1) コミュニティ

コミュニティは、地域社会・地域共同体・共同体など非常に多くの意味を表す用語であり、この多義性がかえってコミュニティ自身を捕らえどころのない曖昧な概念としている。社会学者のヒラリーはコミュニティに 94 通りの定義があり、これらコミュニティの定義には完全な一致がないものの、そのうち約 70 の

表 4 コミュニティの定義および指摘の抜粋

定義者、文献名	内容
マッキーバー ²²	社会類型の理論としてコミュニティ（共同体）とアソシエーション（結社体）を対置概念として提出／コミュニティの基本指標：人の社会的諸関係の全てが、その内部で見いだされるもの／コミュニティの基礎：「地域性」と「共同的感情」をもつもの
『社会学辞典』 ²³	マッキーバーの定義を根拠にした地域概念が、今日では、農業共同体、都鄙共同体、国民共同体、国際共同体にまで拡大されて意味が不明になってきた。／コミュニティと呼ぶときの特性①自給自足とそうした集団に個人を結びつける感情や態度の総体 ②血縁関係を基盤に、客観的構造そのものではなく、その構造の存在の自覚とそこから生じる権利や義務の認知によって構成づけられたもの ③規則の共通の体系によって結びつけられたもの ④制度の集合体
『教育社会学辞典』 ²⁴	コミュニティは地域社会、共同体、地域共同体社会、共同体等に訳されるように、構成要件として社会的相互作用、地域、共通の絆を内含しつつ「地域性」と「共同性」を中心に構成されている社会をいう。
大槻 ²⁵	コミュニティは村落共同体の中で典型的に見られるように、共同体は地域社会であり、地域社会は共同体であった。コミュニティは一方で共同体を喪失して単なる地域社会としての色彩を強めることによって共同性や結合の範囲を曖昧なものとした。一方で地域性を喪失して部分化、観念化された共同体へ移行していく傾向をもってしまった。
松本 ²⁶	コミュニティは、きわめて多義的な用語であり、もっとも広くは何らかの意味で共同生活をいとなむ人々の集合をさす。わが国では、1970 年以降、おおむね小学校くらいの範囲に成立する地域社会をさしてコミュニティという場合が多くなってきた。これは 1969 年の国民審議会コミュニティ問題小委員会『コミュニティ生活の場における人間性の回復』に基づくコミュニティ施策によるところが大きい。／松本によるコミュニティの定義：コミュニティとは、親密で深い絆によって相互に緊密に結ばれた社会関係のネットワークであり、通常、一定の地理的な範囲の上に成立し、「われわれ感情」を生成するような集合体である。
1969 年国民審議会コミュニティ問題小委員会 ²⁷	コミュニティを「生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人及び家庭を構成主体として、地域性と各種の共通目標をもった、開放的でしかも構成員相互の信頼感のある集団」と定義している。
今西 ²⁸	（アメリカ生まれの）コミュニティの訳語に「地域共同体」という字をあてるのは一種の寄り合い所帯を指している。このほかコミュニティの訳語としては「群衆」という言葉がひろく用いられている。コミュニティというかぎり、そこに地域的な限定が必ずともなう。地域的に無限定な地域共同体あるいは群衆は存在しない。ヨーロッパやアジアにおける歴史的・伝統的な村や町では、地域共同体といった寄り合い所帯ではなく、社会学者が自然村と呼んだ、血縁・地縁で結ばれた実体があった。
日笠 ²⁹	まちづくりにおけるコミュニティは、すくなくとも地域、機能、計画の三条件を備えていることが必要である。

定義においては、「地域 area」「共通の絆 common ties」「社会的相互性 social interaction」が共通していることを示した³⁰。表4にコミュニティの定義や指摘の抜粋を示し、以下に「コミュニティ」の概念を簡単に概観する。下記文中の引用及び参考文献は、表4に示す。

コミュニティ（共同体）はマッキーバーにより、1917年の著書『Community』³¹において社会類型の理論としてアソシエーション（結社体）の対置概念として示されたもので、マッキーバーはコミュニティの構成要素として「地域性」と「共同的感情」を示した。大槻は、種々の現代社会の発展がコミュニティにおける地域性や共同的感情の喪失を生んでいることを指摘している。「地域性」という言葉も、地方、地域文化、地域風土といった多義的な用語であるが、今西は、地域的な限定がコミュニティの存在要因であることを強調して、地域性の中でも地理的・空間的要因を重視するとともに、さらに、「寄り合い所帯的なコミュニティ」ではなく、人間社会における歴史的・伝統的な村や町の成り立ちの考察から、地縁・血縁で結ばれた実体の重要性を指摘している。また、日笠は、まちづくりにおけるコミュニティは、地域・機能・計画の三条件が必要であることを指摘している。

2) コミュニティと社会的交換

表2、3に示される通り、社会的交換は道徳的債務により支えられる、個人的義務、感謝、信頼の感情を引き起こす人格化された当事者間の持続する関係であり、この社会的交換には当事者間の対等な関係を生み出す互酬性の交換と権力と服従の関係を生み出す非互酬性の交換が存在する。また、コミュニティ存在の基本構成要素として、マッキーバーは地域性と共同感情性の2つを示している。以上より、コミュニティにおける共同感情性の創造・育成には、社会的交換における互酬性の交換が深く関わっていることが容易に推察され、かつ、生活空間整備のコミュニティ創造・育成においても、社会的交換の知見の活用³²が有用であることが推察される。また、文化人類学者の山口³³は、マリノフスキーの調査によるトロブリアド諸島でのクラ交易などを例に挙げながら、人間のコミュニケーションにとって、モノとモノをやりとりする「交換」の重要性を指摘している。そして、「交換」には貨幣などを用いた経済学的な「等価交換」（経済的交換）と、経済的な価値には替えられない「象徴的交換」（社会的交換）があり、後者の互酬性を持った「象徴的交換」が、より「コミュニケーション」に重要であることを示して、コミュニティに社会的交換が関与していることを示唆している。

2.3 交換原理を介したコミュニティ・デザインの評価指標

今、コミュニティをデザインすることをコミュニティ・デザインと呼び、コミュニティ・デザインを「ある特定された地域における生活者の共同感情性をデザインすること」と定義する。

今西は、アイデンティティ（帰属性、自己同一性）が「自意識（セルフ・コンシャスネス）」と「場意識（サイト・コンシャスネス）」から構成されること、そして、動物においては、場の共有から場の共感が生まれてくることを指摘し、場意識の成立のためには、「場」そのものの存在の重要性を示している³⁵。つまり、今西の指摘によれば、共同感情性を対象としたコミュニ

表 5 ホマンズによる社会的交換プロセスの原理³⁴

ホマンズによる社会的交換プロセスの原理	
第1： 成功命題	ある人のある特定の行為が報酬を受けることが多ければ多いほど、彼はその行為を行うことがますます多くなるだろう
第2： 刺激命題	過去においてある人が報酬を受けた時に、ある特定の刺激あるいは刺激群が現れていたとする。現在の刺激が過去のそれに似ていればいるほど、その人はその行為あるいは類似の行為を行うことが多くなるであろう
第3： 価値命題	ある人の行為結果がその人にとって価値があればあるほど、それだけ彼はその行為を行うことが多くなるであろう
第4： 剝奪－飽和命題	ある人が近い過去において特定の報酬を受けることが多ければ多いほど、彼にとってその後の報酬の単位あたりの価値は低下して行くであろう
第5： 攻撃－是認命題	①ある人の行為が期待した報酬を受けなかったり、あるいは予期せぬ罰を受けたりする時、彼は怒るであろう。彼は攻撃的行動をとることが多くなるであろう。そしてそのような行動の諸結果は彼にとってより価値のあるものとなるであろう ②ある人の行為が期待した報酬を、とくに期待以上の大きな報酬を受ける時、あるいは予期した罰を受けないとき、彼は喜ぶであろう。彼は是認的行動をとることが多くなるであろう。そしてその行動の結果は彼にとってより価値のあるものとなるであろう。

表 6 交換原理を介したコミュニティ・デザインの評価指標

評価指標	内 容	参 考
場の原理	コミュニティデザインを行う實在の「場」があること	今西の指摘
成功の原理	当事者の行為の成功により、当事者が報酬を受けること	表 4-5、ホマンズ：成功命題
刺激の原理	成功の原理における当事者の行為と報酬の関係が不確定でなく、ある程度決まっていること	表 4-5、ホマンズ：刺激命題
価値の原理	当事者の行為が、当事者にとって価値があること	表 4-5、ホマンズ：価値命題
変化・複合の原理	成功の原理、刺激の原理が単調でなく、変化に富み、当事者が飽きないこと	表 4-5、ホマンズ：剥奪－飽和命題
継続性の原理	成功の原理、刺激の原理が単発的でなく、継続すること	表 4-6、石川の指摘

ティデザインにおいて、「場」の存在そのものが重要なファクターになる。一方、社会的交換の知見からは、表 2 の社会的交換の特徴、表 3 の互酬性の交換に関する指摘、そして表 5 に示されるホマンズによる社会的交換プロセスの原理などが、社会的交換を成功させる要因としてあげられる。

コミュニティをデザインするということは、地域の共同感情性をデザインすることであり、共同感情性をデザインする一つのアプローチとして、対象地域における人々の意識を共有化するために社会的交換の知見を活用することが考えられる。表 6 に今西の指摘やホマンズ等の社会的交換の知見を組み合わせで作成したコミュニティ・デザインの評価指標を示す。

表 6 に示す評価指標は、主として社会的交換がうまく機能するための原理を示したもので、「場の原理」「成功の原理」「刺激の原理」「価値の原理」「変化・複合の原理」「継続性の原理」の 6 つの原理からなる。「場の原理」は、今西の指摘する場の重要性を考慮したものである。「成功」「刺激」「価値」「変化・複合」の原理は、表 5 のホマンズが示した交換原理のプロセスにおける 5 つの命題のうち、第 1 命題から第 4 命題までを適用したものである。表 5 でホマンズは第 4 命題を「剥奪－飽和命題」としているが、表 6 では「成功の原理、刺激の原理が単調でなく、変化に富み、当事者が飽きないこと」とする「変化・複合の原理」としている。「継続性の原理」は、表 2 における経済的交換と社会的交換の比較における石川の指摘を抽出したものである。

これまでの、生活空間整備においては、コミュニティの概念そのものが曖昧であることにも起因して、多くの場でコミュニティ育成の必要性が指摘されてきたが、具体的にコミュニティ・デザインをどう進めれば良いのかは漠然としていた。表 6 の 6 つの評価指標は、コミュニティ・デザイン施策の企画・立案時の基本要素としての利用や、既往の生活空間整備の施策をコミュニティ・デザインの視点から評価する場合などにおいて有用であると示唆され、今後、効果的なコミュニティ・デザインの推進に活用できるものと考えられる。

2.4 事例に見る交換原理

ここでは「交換」が内在している事例として、香川県のどんぐり銀行の事例と岩手県花巻市のメルヘン歩道の 2 つの事例³⁹を取り上げ、表 6 のコミュニティ・デザインの評価指標を用い、これらの事例をコミュニティ育成の面から評価する。

香川県造林協会では、1992 年 10 月より「どんぐりの実を預金し、苗木で払い戻す」というどんぐりを貨幣としたどんぐり銀行を開設して、通帳を介しての複合的交換が継続的に行われている。香川県におけるどんぐり銀行の活動は、阪神淡路大震災後、ボランティアの手を通じて兵庫県内にも波及し、神戸ドンクリネットとして、現在大きな活動が生まれている。

また、岩手県花巻市商店街の「花巻メルヘン街道」では、延長約 50m の区間で 30cm 角の歩道ブロック内に、12cm * 6cm の大きさの真ちゅう性のメモリアルプレートが約 300 枚相当が設置されていた*。この事例では、市民と行政間において、プレート設置希望者が行政に費用を支払い、そのかわりに市民等の個人

* 注：現在、メモリアルプレートは、商店街前の県道改修工事に伴い撤去されている。（1996 年 10 月 30 日、現地確認）

の名称やメッセージ等を、歩道という公共の場に長期間にわたって表示できるという交換が認められる。

表7は、表6の評価指標を用いて、著者らの主観的判断により、香川どんぐり銀行の事例と花巻メルヘン歩道の事例を評価した結果を示したものである。表7より、コミュニティ育成の面で、どんぐり銀行の事例は表6に示した6つの原理を全て満足しており優れたプログラムであるといえる。一方、メルヘン歩道の事例は、変化・複合の原理、継続性の原理が弱いコミュニティ・プログラムと評価される。

表 7 表6による交換事例の評価（凡例 ●左欄の項目が認められるもの）

評価指標	内 容	香川どんぐり銀行	花巻メルヘン歩道
場の原理	コミュニティデザインを行う実在の「場」があること	●：どんぐり銀行という実在の場があること	●：メモリアルプレート歩道に設置する場や機会があること
成功の原理	当事者の行為の成功により、当事者が報酬を受けること	●：通帳にどんぐりが預金されると利子がつき、また、どんぐりが 500 個貯まると苗木 1 本と交換できることなど	●：市民が 5000 円の費用を支払うことで、メッセージ入りのプレートが公共の場に設置できること
刺激の原理	成功の原理における当事者の行為と報酬の関係が不確定でなく、ある程度決まっていること	●：どんぐりが疑似貨幣として、500 どんぐりで苗木と交換できることなど	●：メッセージを公共の場に設置する事で、非日常の情報発信ができることなど
価値の原理	当事者の行為が、当事者にとって価値があること	●活動が、自然とふれあえること、森林保全活動であることなど	●メッセージ送付者へメッセージを公共の場を通して発進することなど
変化・複合の原理	成功の原理、刺激の原理が単調でなく、変化に富み、当事者が飽きないこと	●銀行、通帳、植樹などの多彩なメニューをもっていること	（プログラムが、費用負担・プレートの作成・設置と決まっている）
継続性の原理	成功の原理、刺激の原理が単発的でなく、継続すること	●どんぐり銀行の通帳により、活動が継続性を持つこと	（参加者の行為が、単発であり、継続性がない）

3. 生活環境把握における「アイデンティティ」を介したアプローチ

3.1 アイデンティティについて

鏝（たたら）は、その著書³⁷⁾の中で主として心理学的見地からアイデンティティについて示している。以下、鏝の著書より心理学的アイデンティティについてその概要を示す。

アイデンティティとは、心理学者エリクソンの著書『幼児期と社会、1950 年』においてはじめて心理・社会的発達の用語として用いられた言葉であり、人間のライフサイクルに基づく発達論の中で示された概念である。エリクソンは、人間の発達段階を乳児期から老年期までの8つにわけ、第Ⅴ段階の思春期・青年期において、人間が他人の影響から少しづつ離れ自分で自分を作りだそうとする「同一化（アイデンティフィケーション）」から「同一性（アイデンティティ）」のプロセスがあることを示した。その後エリクソンは著書『アイデンティティ、1968 年』の中で、アイデンティを作り上げている8つの心理学的側面を個体発達分化に対応させて示した。表8に鏝の解説によるエリクソンの示したアイデンティティの8つの心理学的側面を示す。

鏝はアイデンティティの意味するものとして、①自分のルーツに関係するもの、②自分の仲間関係の中での自分の位置づけ、③自分と社会との関係の中での自分の位置づけ、の三つを挙げている。そして、現代社会では、アイデンティティがエリクソンの用いた概念とは違って、一般化し多様な意味合いで用いられていることを示し、現在アイデンティティの用語の使用区分として、①現在一般社会で使用されるもの、②臨床的に使用されるもの ③社会心理学の研究の中で使用されるもの、の三つを示している。

また、地理学者のレルフは、場所のアイデンティティを「一つの場所を他の場所と区別するもの、また、それによってその場所が他の場所とはっきりと識別されるもの」と説明し、強いアイデンティティを持つ場所の条件として、土地・活動・意味の三要素の相互関連性が必要であることを指摘している³⁸⁾。

表 8 エリクソンによるアイデンティティの心理学的側面（鏝による解説から作成）³⁸⁾

アイデンティティの心理学的側面	
1	自分の内的な時間意識のあり方についてみたもの
2	自己意識についてみたもの
3	社会的価値の選択についてみたもの
4	社会的役割の選択についてみたもの
5	アイデンティティ意識の状態についてみたもの
6	性的アイデンティティの面からみたもの
7	権威性・指導性という側面からみたもの
8	自己の信念・イデオロギーという面からみたもの

3.2 今西の生物社会学的アイデンティティの考察

今西は、生物社会学的見地からアイデンティティに関する重要な指摘を行っている。しかしながら、アイデンティティに関するこれらの指摘は、今西の晩年のものであることから、講演・インタビュー・小論などとその発表形態の違いにより、これらの指摘は断片化しており、かついくつかに散在している。したがって、今西のアイデンティティ観をつかむためには、これら散在したいくつかの指摘の断片を全体にまとめ挙げる作業が必要になる。本研究では今西の著書『自然学の提唱』⁴⁰『自然学の展開』⁴¹に示されているアイデンティティに関する今西の指摘をKJ法により抽出した。そして、抽出された今西によるアイデンティの指摘を、表9、表10にまとめた。

表9よりわかるように、今西は、生物のアイデンティティを生まれつき備わったプロトアイデンティティ（原帰属性）と、生まれてから取得するセルフコンシャスネス（自意識）およびサイトコンシャスネス（場意識）からなることを示している。特徴的なことは、生物と環境の一元論的な関係の把握から「場」を重視したアイデンティティとしてサイトコンシャスネスの概念を提示していることである。

また、表10は、今西による生まれてから取得する生物のアイデンティティを、著者らが一部拡大解釈を行い、今西自身が構築した生物社会構造により整理したものである。表10において、サイトコンシャスネスの対象は生物の生活の場として示した。今西の生物社会構造は、種社会を単位として種個体・種社会・生物全体社会の三層を大きな骨格としており、その中間位置に群れ社会が存在する。ここでは、社会構造として、種個体・群れ社会・種社会を考える。今西は、著書『生物の世界』の中で環境を「生物がその生活内容

表 9 今西の生物のアイデンティティの種類

区分	名称	内容	今西の指摘
生まれつきそ なわったアイ デンティティ	プロトアイデン ティティ（原帰属 性）	生物に本来そなわった、生物の一つの属性であり、同種の生物の個体が互いを識別するはたらきであり、かつ生活の場を識別するはたらきを指す。	
生まれてから 取得するアイ デンティティ	セルフコンシャス ネス	自意識および自己同一性のこと	「セルフコンシャス ネスとサイトコンシャ スネスは、二つあって完 結する」（今西 1984『自 然学の展開、一場の共 有から共感へー』p. 187）
	サイトコンシャス ネス	場意識のこと。生物はその場と自分を結びつけている。	
	その他	多義的なアイデンティの意味として、自己同一性のほかに、帰属性が重要	

表 10 生物社会構造を介した今西のアイデンティティの解釈
（著者らによる一部拡大解釈を含む）

生物社会の構 造レベル	単独生活者		群れ生活者		アイデンティ ティの特徴
	セルフコンシャスネス： 対象	サイトコンシャスネス：対 象の生活の場	セルフコンシャスネス： 対象	サイトコンシャスネス：対 象の生活の場	
種個体 レベル	個体（自己） ●	個体の生活の場 ●	個体（自己） ●	個体の生活の場 ●	自己同一性 ／帰属性
群れ社会 レベル	群れ —	群れ社会 —	群れ ●	群れ社会 ●	
			集団帰属性	集団帰属性	
種社会 レベル	種 —	種社会 ●	種 —	種社会 ●	

注 凡例 ●：アイデンティが存在する —：アイデンティティが存在しない

表 11 種レベルのアイデンティティに関する今西の指摘の抜粋

・「サルには、自分の属している種に対して、あるいは種社会に対して帰属性があるかどうかという、私は否定的であって、ないと断言したい。」（今西 1984『自然学の展開、一自然学へ至る道』p.66）
・「人類愛というのは、サルが同じ種に対して帰属意識がない如く、人間に本来そなわったものではない。国は別にして、生物的な種というものに対する忠誠心はない。人類というものにアイデンティティをもっているかといえ、ない。せいぜい国どまり。」（今西 1984『自然学の展開、一場の共有から共感へー』p. 197）

を表現する生活の場」と定義⁴²し、社会を「その中でその構成員が生活する共同体的な生活の場」と定義⁴³した。サイトコンシャスネス（場意識）は今西の定義によれば、場を意識することであり、また、生物がアイデンティティを作る場は生活の場に他ならない。したがって、サイトコンシャスネスは、種個体においては種個体の生活の場、群れに置いてはその生活の場である群れ社会、種においてはその生活の場である種社会を対象とすることがわかる。アイデンティティに関する今西の指摘からは、このサイトコンシャスネスの具体対象は明確ではなく、種個体のみに限定されている可能性もあるが、表 10 では拡大解釈してサイトコンシャスネスの対象を種個体の他に、群れ社会、種社会にまで適用している。

次に、セルフコンシャスネス（自意識）の対象は、それぞれの社会構造を構成する主体として示しているが、表 11 に示す種レベルに対する今西の指摘から、セルフコンシャスネスは、種個体・群社会レベルにおいて存在し、種社会レベルでは存在しないものとして表 10 に示した。

3.3 生活空間におけるアイデンティティ

ここでは、今西の生物社会学的見地によるアイデンティティを再定義・再構築して、人間の生活空間におけるアイデンティティに適用し、その構造や特徴について考察する。

1) アイデンティティの構造について

心理学的アイデンティティは、主として個人の人間を対象にしたもので、種個体・群れ社会・種社会からなる生活空間においてアイデンティティの創造・育成を推進する場合、こうした個々の人間を対象としたアイデンティティの枠組みでだけでは、十分に対応しきれない。一方、今西による生物社会学的見地によるアイデンティティは、環境と生物との一元論的な認識を根底に持ち、場所性や集団性を加味したものとなっているため生活空間整備におけるアイデンティティの創造・育成になじむ。したがって、表 9、10 に示した今西による「群れ社会レベル」のアイデンティティの構造のうち、生まれてから取得するアイデンティティを再構築して生活空間整備の場面に導入する。

表 9 に示されるように、今西は生物のプロトアイデンティを「生物に本来そなわった、生物の一つの属性であり、同種の個体が互いを識別するはたらきであり、かつ生活の場を識別するはたらき」として定義している。今、この定義から、「生物に本来そなわった」という記述を削除して「生物が生まれてから取得する」に置き換えれば、これはとりも直さずセルフコンシャスネスとサイトコンシャスネスからなる「生物が生まれてから取得するアイデンティティ」と考えることができる。したがって、表 12 に示すようにセルフコンシャスネスは「同種の個体が自己と他者を識別する識別するはたらき」、サイトコンシャスネスは「生活の場を識別するはたらき」と再定義する。表 9 においては、セルフコンシャスネスの中に自意識と自己同一性があるが、生まれてからのアイデンティティは、表 13 に示す様に、自己同一性は種個体レベルにおいて備わったもの、帰属性は種個体・群れ社会・種社会の全ての社会レベルに備わったものとする。ここで、自己同一性とは 3.1 で示した心理学的アイデンティティにおけるアイデンティティの意味を持つものとする。

表 12、13 の再定義、再整理より表 9、10 に示した今西の群れ生活者のアイデンティティを人間社会に適用し、再構築して表 14 に示す。生活空間におけるアイデンティティは、個人レベル・集団レベル・全体レベルの 3 層の生活者レベルごとにアイデンティティを考える。以下、各生活者レベルごとのアイデンティティについて示す。

個人レベルにおける「個人」とは、個人や自己をさす。個人レベルのアイデンティティは、自己同一性と帰属性を持つ。帰属性は自己と他者を識別するセルフコンシャスネス（自意識）と自己の生活の場を識別す

表 12 セルフコンシャスネスとサイトコンシャスネスの再定義（著者らによる）

セルフコンシャスネス： 自意識	サイトコンシャスネス： 場意識
同種の個体が自己と他者を識別するはたらき	生活の場を識別するはたらき

表 13 生まれてから取得するアイデンティティの種類の再整理（著者らによる）

アイデンティティの種類	存在する社会レベル
自己同一性	種個体
帰属性（セルフコンシャスネス、サイトコンシャスネス）	種個体、群れ社会、種社会

表 14 生活空間におけるアイデンティティの構造
(今西のアイデアを著者らが修正・拡大解釈して作成したもの)

(4) 西のアイデンティティを省きながら修正・拡大解釈して作成したもの						
区分：名称	対象とする社会構造	アイデンティティの特徴				アイデンティティの存在の仮定
生まれてから取得するアイデンティティ：アイデンティティ	個人レベル	自己同一性				●
		帰属性：個人帰属性	セルフコンシャスネス：自意識	自己と他者を識別するはたらき		●
			サイトコンシャスネス：場意識	自己の生活の場を識別するはたらき	文化的帰属性	●
				地理的帰属性	●	
	集団レベル	帰属性：集団帰属性	セルフコンシャスネス：自意識	自己と集団に属する以外の他者を識別するはたらき		●
			サイトコンシャスネス：場意識	集団の生活の場を識別するはたらき	文化的帰属性	●
				地理的帰属性	●	
		全体レベル	帰属性：全体帰属性	セルフコンシャスネス：自意識	自己と対象地域に属する以外の他者を識別するはたらき	
サイトコンシャスネス：場意識	対象地域全ての生活の場を識別するはたらき			文化的帰属性	—	
				地理的帰属性	●	

注) 凡例 ●：アイデンティティが存在する —：アイデンティティが存在しない

るサイトコンシャスネス（場意識）からなる。個人レベルのサイトコンシャスネスには文化的帰属性と地理・空間的帰属性が存在する。個人レベルのアイデンティティのうち、帰属性のアイデンティティを「個人帰属性」と呼ぶ。集団レベルにおける「集団」とは、家族、集団、地区住民などをさす。「集団」には「個人」を含む。集団レベルのアイデンティティは、帰属性のアイデンティティであり、自己と集団に属する以外の他者を識別するセルフコンシャスネス（自意識）と集団の生活の場を識別するサイトコンシャスネス（場意識）からなる。集団レベルのサイトコンシャスネスには文化的帰属性と地理・空間的帰属性（表 14 では地理的帰属性と略記）が存在する。集団レベルの帰属性を「集団帰属性」と呼ぶ。全体レベルにおける「全体」とは、対象となる生活空間に属する全ての人をいう。全体には、「個人」、「集団」を含む。全体レベルのアイデンティティは、帰属性のアイデンティティであり、自己と対象地域に属する以外の他者を識別するセルフコンシャスネス（自意識）と対象地域全ての生活の場を識別するサイトコンシャスネス（場意識）からなる。全体レベルのサイトコンシャスネスには地理・空間的帰属性が存在し、文化的帰属性は存在しない。全体レベルの帰属性を「全体帰属性」と呼ぶ。

2) 文化的帰属性と地理的・空間的帰属性について

サイトコンシャスネス（場意識）について若干考察する。表 14 ではサイトコンシャスネスとして、文化的帰属性と地理的・空間的帰属性の二つを示した。

文化的帰属性とは、家族、文化・スポーツ、同好会、企業、行政機関、小学校等のいわば「形の無い」文化情報によるものであり、多岐にわたる。これら文化的帰属性は、個人の価値観や嗜好により、個人ごとに変化することが容易に想像がつく。したがって、文化的帰属性は、個人・集団レベルには存在し得るが、対象地域の全ての人を対象とした全体レベルでは存在し得ない。生活空間の全体レベルは、今西の生物社会構造の種レベルに対応しており、種レベルのアイデンティティについて今西は、先に示した表 11 の指摘をしている。表 11 における今西の指摘は、種レベルすなわち全体レベルにおける文化的帰属性の存在に対して否定的な意見を示したものである。

一方、地理的・空間的帰属性とは、山の尾根線、街並み、川、などの「形」を持つ地理・空間情報によるもので、情報の条件が同じであれば、これらは地域に住む全ての人に共通であり個人差はない。つまり、生活空間整備におけるアイデンティティの創造・育成において、文化的帰属性は個人・集団レベル止まりであるが、地理的・空間的帰属性は、個人レベル・集団レベル・全体レベルの帰属性になる可能性を持つ。逆に言えば、全体レベルの帰属性のうち、サイトコンシャスネス（場意識）は、地理的・空間的帰属性以外は存在しえない。このように、地理的・空間的帰属性を生み出す、地理・空間情報は生活空間整備において重要であり、

山の稜線の保全や自然斜面の保護などの意義はここにある。

また、進士は⁴⁴、その著書の中で「永く住むことで時間的座標軸が成立し、次第に平凡な風景をも空間的座標軸にかえていく。それが“ふるさと”の構造である」と指摘している。そして、具体事例として、京都や各地の小京都の盆地地形を例に挙げている。進士の指摘によれば、先の地理的帰属性が時間的帰属性になることで、ふるさと意識が生まれるきっかけができることになり、生活空間における地理・空間情報の持つ意義がさらに重要度を増す。

3) 生活空間におけるコミュニティとアイデンティの関係

2. では、「コミュニティ」概念の基本構成要素として、マッキーバーの指摘した「地域性」と「共同感情性」を示した。

一方、表 13 では、生活空間における人間を対象としたアイデンティティとして、個人レベル・集団レベル・全体レベルのアイデンティティを示した。この中で、複数の個人を対象とするのは集団レベルと全体レベルの帰属性である。さらに、集団レベルの帰属性である集団帰属性のサイトコンシャスネスには文化的帰属性と地理・空間的帰属性の双方が存在するが、全体レベルの帰属性である全体帰属性には、文化的帰属性は存在しえず地理・空間的帰属性のみの存在となることを示した。

集団帰属性では、その構成者が共有する材料としての文化的帰属性と地理・空間的帰属性はそろっているが、全体的帰属性では、その構成者が共有するべき材料が、地理・空間的帰属性しか存在しないことになる。したがって、コミュニティは集団レベルでは生まれやすいが、全体レベルでは生まれにくい。生活空間におけるコミュニティの多くは、集団レベルにおける集団帰属性としてのセルフコンシャスネスやサイトコンシャスネスが、集団レベルを構成する複数の人々の間で共有化されたもの、と説明できる。

4) 生活科授業に見るふるさと意識や地域への帰属意識

1995 年に実施された徳島県下の小学校生活科意識調査⁴⁵において、小学校生活科授業の実施により、ふるさと意識や地域への帰属意識がどのように変わったのかというアンケート調査を行っている。図 1 は小学校生活科授業の実施により、子供、教師、保護者、地域の人々のふるさと意識や地域への帰属性に変化が見られるかどうかを質問した結果である。ここで、ふるさと意識とは、生活者の居住地およびその周辺地域の自然環境や社会環境に対する帰属性、つまり、生活の場としてのふるさとに対する生活者の帰属性を意味する。調査結果からは、子供については約 6 割、教師は約 5 割の人がふるさと意識が強くなったと答えている。また、生活科アンケート調査と同時に実施された生活科担当教師のヒアリング調査結果から、子供のふるさと意識や地域への帰属性の変化に対する生活空間の関与については「生活科の活動を通し、地域を知ることがふるさと意識を高めることにつながる。」という意見が多く出された。

生活科授業は、学校間の格差はあるが年間授業時間の約 3 割程度は小学校外に出て、地域の自然や地域に住む人々と直接かかわる授業を行っている。3.2 で見たようにアイデンティティに関して今西は「場」の存在そのものの重要性を指摘している。図に示した小学校生活科授業の実施にみるふるさと意識や地域への帰属意識の高揚は、アイデンティティに関して「場」の存在の重要性を裏付けるものといえる。

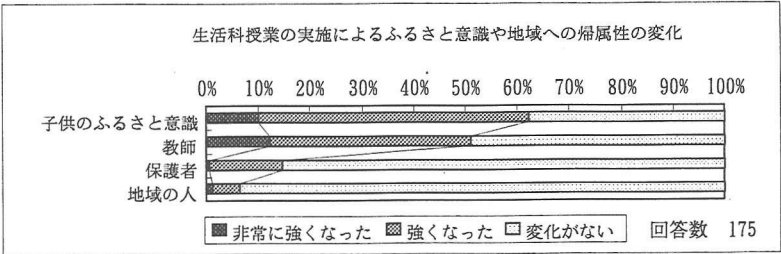


図 1 生活科授業の実施によるふるさと意識や地域への帰属性の変化 (1995 年)

4. おわりに

本研究では、生活空間と人間との関わりに焦点をあて、コミュニティに関わる「交換」概念、及び「アイデンティティ」の概念の2つを取り上げ、既往の研究成果に「生活環境主義」の視点と生物社会学的見地を加味して、生活空間整備の実践の場において、コミュニティ及びアイデンティティを育成する手法を得るための基礎的考察を行った。本研究の成果を以下に示す。

1) 生活環境把握における「交換」を介したアプローチ

- ① モース、ブラウ、ホマンズらの研究により交換理論を整理し、社会的交換の特徴や社会的交換における互酬性の交換の特徴について示した。そして社会的交換がコミュニティの創造・育成に深く関与していることを指摘した。
- ② 今西、ホマンズらに指摘をもとに、「交換原理を介したコミュニティ・デザインの評価指標」として、「場」の原理、成功の原理、刺激の原理、価値の原理、変化・複合の原理、継続性の原理の6つを示した。
- ③ 社会的交換を含む事例として「香川どんぐり銀行」「花巻メルヘン歩道」の事例を紹介し、これら事例を「交換原理を介したコミュニティ・デザインの評価指標」により評価した。

2) 生活環境把握における「アイデンティティ」を介したアプローチ

- ① 断片化・散在化している今西によるアイデンティティの指摘を抽出・整理し、生物社会学的見地による今西の生物社会構造を介したアイデンティティの構造を明らかにした。
- ② 人間を対象とした生活空間のアイデンティティとして、今西の生物社会的アイデンティティより「群れ社会レベル」のアイデンティティを導入し、生物を人間へ置き換えて、個人レベル・集団レベル・全体レベルからなる生活空間におけるアイデンティティの構造を示した。導入にあたり、今西によるセルフコンシャスネス（自意識）及びサイトコンシャスネス（場意識）を再定義し、かつ、サイトコンシャスネスを文化的帰属性と地理的・空間的帰属性に区分して、今西の生物社会的見地からのアイデンティティの構造を再構築した。
- ③ 小学校生活科意識調査における小学校生活科授業の実施に起因したふるさと意識や地域への帰属意識の高揚は、アイデンティティに関して「場」の存在の重要性を裏付ける結果と考えられる。

以上に示した本研究の成果の有用性や今後の課題は次のとおりである。生活環境を意味論的・生物的に把握する本研究の成果は、生活空間とその生活者である人間の関わり方をデザインする上で有用で、そのうちのひとつとして、「交換」や「アイデンティティ」を介したデザインアプローチは、これまでとらえどころがなく漠然としていたコミュニティやアイデンティティを、科学的かつ効果的に構築していく上で有用であると考えられる。具体的には、今回の研究成果は、コミュニティにおいては交換概念によるコミュニティデザインの6項目の評価指標を示したこと、アイデンティティにおいてはその構築の対象となる生活空間のアイデンティティの構造や特徴を示したことで、今後アイデンティティ構築の計画に活用できることなどにおいて、有用であると考えられる。これらの成果は、現時点では既往の研究成果を用いた基礎的研究の段階であり、事例についても、本研究成果の確認程度にとどまっている。今後、本研究成果を用いた事例研究、具体事例への適用、方法論としての拡充が必要と考えている。特に、この分野の調査研究に際しては、社会学・心理学・人類学等の研究者との協同作業と同時に、各研究分野間でのコミュニティ・アイデンティティ等の用語の定義の相互確認が急務と思われる。

参考文献

- 1 ルイス・マンフォード著、生田勉ほか訳：『都市と人間』、思索社、1972年
- 2 E.F. シューマッハー著、小島慶三ほか訳：『スモール・イズ・ビューティフル』、講談社学術文庫、講談社、1986年第1刷・1992年第10刷
- 3 今西錦司：人間社会の形成、日本放送協会、p. p. 20-36、1966年4月第1刷・1994年2月第25刷
- 4 日笠端：『コミュニティの空間計画』、共立出版、1997年6月
- 5 菊池美代志、江上わたる：コミュニティの組織と施設、多賀出版、1998年2月28日
- 6 奥田道大：都市コミュニティの理論、東京大学出版、1983年
- 7 奥田道大：都市型社会のコミュニティ、けい草書房、1993年4月
- 8 エドワード・レルフ著、高野岳彦ほか訳：場所の現象学、筑摩書房、1991年
- 9 神谷育司編者：『心理学 人間理解の方法序説』、福村出版、1988年5月
- 10 安倍淳吉ほか監修：現代心理学の理論的展開、川島書店、1988年8月
- 11 伊達達雄：人文地理学における地域政策研究の課題と展望、地理学評論第71巻第5号、p. p. 315-322、1998年5月
- 12 鳥越皓之ほか：環境問題の社会理論、生活環境主義の立場から、お茶の水書房、p. p. 14-29、1989年3月
- 13 石川実：交換理論、『新睦人・中野秀一郎編：社会学のあゆみ、パートII』、p. 133、1984年初版第1刷・1993年初版第9刷
- 14 前掲13、p. 135
- 15 前掲13、p. p. 153-155
- 16 前掲13、p. p. 135-136
- 17 前掲13、p. 145-148
- 18 前掲13、p. 155
- 19 前掲13、p. 145
- 20 前掲13と同じ
- 21 前掲13、p. 135
- 22 大槻宏樹：コミュニティづくりを考えるーコミュニティとはなにかー、『コミュニティづくりと社会教育』、全国社会教育連合会、p. p. 10-24、1991年7月
- 23 前掲22
- 24 前掲22
- 25 前掲22
- 26 松本康：都市空間の変容と住民、『宮島喬編、現代社会学』、p. p. 214-217、1995年
- 27 前掲26
- 28 今西錦司：生態学と自然学のあいだ、『自然学の展開』、講談社学術文庫、1992年12月第1刷・1993年4月第4刷、p. p. 73-77
- 29 前掲4、p. p. 188-190
- 30 山根常男ほか編集：『社会学(5) 地域社会』、有斐閣、p. 66、1980年11月初版・第1刷
- 31 R.M. マッキーパー著、中久朗訳：『コミュニティ』、ミネルバ書房、1975年12月初版第1刷・1979年6月第3刷
- 32 澤田俊明：『交換の街づくり』の提唱、特集・新地域主義の時代、近代建築 Vol. 50、p. p. 18-19、1996年2月
- 33 山口昌男：『文化人類学への招待』、岩波新書、p. p. 28-29、1982年
- 34 前掲13、p. p. 138-139
- 35 今西錦司：場の共有から共感へ、『自然学の展開』、講談社学術文庫、p. p. 184-198、1992年12月第1刷・1993年4月第4刷
- 36 澤田俊明：主体性のまちづくりを目指して、土木学会・環境システム研究 Vol. 22、p. p. 342-351、1994年10月
- 37 鍾（たたら）幹八郎：『アイデンティティの心理学』、講談社、1990年9月第1刷・1992年1月第4刷
- 38 前掲35、p. p. 74-81
- 39 エドワード・レルフ：基調講演「場所と都市のアイデンティティ」、第4回都市環境デザインフォーラム関西記録集『まちとアイデンティティ』、都市環境デザイン会議・関西ブロック、p. p. 11-22、1996年5月
- 40 今西錦司：『自然学の提唱』、講談社学術文庫、1986年6月第1刷・1992年9月第10刷
- 41 今西錦司：『自然学の展開』、講談社学術文庫、1992年12月第1刷・1993年4月第4刷
- 42 今西錦司：『生物の世界』、『今西錦司全集第1巻』、講談社、p. 77、1993年
- 43 前掲42、p. 83
- 44 進士五十八：『緑のまちづくり学』、学芸出版社、p. 162、1987年4月
- 45 澤田俊明、長嶋紀之、山中英生、水口裕之：生活科の視点から見た屋外生活空間の利用状況に関する一分析、土木学会・環境システム研究 Vol. 24、p. p. 203-209、1996年10月